

11月30日(日) サムエル記第一11章11～15節

「今日はだれも殺されてはならない。今日、主がイスラエルにおいて勝利をもたらしてくださったのだから。」(13節)

これまでサウルは戦いを指揮したことがなかったはずですが、見事な作戦で勝利へと導きました。彼は、イスラエルの兵士を三組に分け、アンモン人の兵士がまだ眠っている夜明けに、敵陣の真ん中に突入し、昼までアンモン人を討ちました。生き残った者は散り散りに逃げ、「二人の者がともにいることはなかった」とは、そのくらい皆が一目散に逃げたことを言っているのでしょうか。しかし、この勝利をすべてサウル自身の栄光にはできないでしょう。むしろ、サウルの上に、激しく主の霊が下りましたが、(10章10節)まさに、主の霊を通してサウルは勝利へと導かれたと考えるべきでしょう。つまり、サウルを通して主が戦われ、イスラエルを勝利に導かれたということです。

戦いに勝利をしたサウルに対して、人々は『サウルがわれわれを治めるのか』と言った者たち(10章27節)を殺すことを進言します。しかし、サウルはそのことばに決して乗せられることなく、むしろ「今日はだれも殺されてはならない。今日、主がイスラエルにおいて勝利をもたらしてくださったのだから。」と言います。つまり、今回アンモン人に対して勝利をしたのは、決してサウル自身の能力や知恵によるものではなく、あくまで主が勝利を与えてくださった結果であることをわきまえていましたし、民に対して勝利を与えてくださった主を証ししています。私たちは周りから持ち上げられますと、気分がよくなってしまい、有頂天になったり、傲慢になったり、自分を過信してしまうことがあります。また、主に栄光を帰すのではなく、自分に栄光を帰してしまいます。私たちも主のすばらしいみわざを見せていただいたなら、人にではなく主に栄光を帰して、主をほめたたえるべきです。常にたたえられるのは人ではなく、主ご自身であるべきです。そして、主の御前における謙遜さを決して忘れないようにしましょう。自らを高くする者を主は必ず低くされるからです。

12月1日(月) サムエル記第一12章1～6節

「あなたがたが私の手に何も見出さなかったことについては、今日、あなたがたの間で主が証人であり、主に油注がれた者が証人である。」(5節)

ここでサムエル自らが王政の開始を宣言します。2節で「私は若いときから今日まで、あなたがたの先に立って歩んできた」とありますように、サムエルが主に召されたさばきつかさとしてイスラエルを導いてまいりました。ところがアンモン人との戦いで明らかにされたように、今は王であるサウルが人々の先頭に立って歩んでいるというのです。3節で「さあ今、主と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。」と言って、その内容を5項目あげています。もちろんそれに対して人々は「あなたは私たちを虐げたことも、踏みじったことも、人の手から何かを取ったこともありません。」と言います。そして確かに、サムエルはこのようなことをしなかったけれども、8章10～18節で警告が与えられたように、これから後王となる者が、家畜を奪ったり、国民を虐げたり、打ちたたいたり、賄賂を取って政治を曲げるようなことをするかもしれないとの警告を人々に与えているとも考えられます。

さらにある人が「証人は」と言ったことに対して、「主である。」と答え、それに加えて「モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖をエジプトの地から上らせた方である」(6節)と言います。つまり、証人である主は、イスラエルの民の先祖をエジプトから上らせるような驚くべきみわざをなされたお方であり、サムエル自身はその主を証人として立てられるほどに、御前に真実に歩んできたけれども、民は、その主を拒んで王を立てたことについても、主が証人であることをサムエルは今一度強調しているのでしょう。

サムエルの主の御前における働きは、主の召しに忠実なものであり、主の御前に真実であったことがよく分かります。それはサムエルが常に主の目を意識しながら歩み、主の御声を聞きながら、それに従ったことを証ししています。私たちもサムエルのように、主に忠実に従う歩みを最後までなし、人生の最後にはパウロのように「私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、最善を尽くし」(使徒の働き 24 章 16 節)ましたと告白できるような歩みをさせていただきたいと思わされます。

12月2日(火) サムエル記第一12章7～12節

「さあ、立ちなさい。私は、主があなたがたと、あなたがたの先祖に行われたすべての正義のみわざを、主の前であなたがたに説き明かそう。」(7節)

7節で「さあ、立ちなさい。私は、主があなたがたと、あなたがたの先祖に行われたすべての正義のみわざを、主の前であなたがたに説き明かそう。」と言い、これまでのイスラエルの歩みを振り返ろうとしています。まず8節では、出エジプトからカナンの地の占領までを簡潔に表しています。そして9節から士師の時代へと入ってまいります。まず「ハツオルの軍の長シセラ」は、士師記4章2節に出てまいります。「ペリシテ人」は、士師記10章7節、13章1節に記されています。「モアブの王」は、士師記3章12～14節に出てまいります。ここで共通しているのは、その前に「主を忘れたので」(9節)「主を捨て」(10節)との表現があることです。つまり、主がハツオルの軍の長シセラの手、ペリシテ人の手、モアブの王の手に渡されたのは、すべてイスラエルが主を忘れ、主を捨てたからであり、それに対して主が怒りを燃やし、イスラエルを懲らしめるためだったということです。10節で悔い改めの叫びを主に対してあげました。そうしますと、主はさばきつかさと呼ばれる人たち、エルバアル、バラク、エフタ、サムエルをそれぞれ召して、イスラエルに遣わし、人々をそれらの敵の手から救い出し、安らかに住みました。まさに、主のイスラエルに対してなされた正義のみわざとは、彼らが主を忘れ、主を捨てたなら、主がそれを罰せられ、その一方で彼らが悔い改めて救いを求める叫びをあげたなら、彼らを救い出したことです。それこそが主の正義です。まさに、主は私たちに対しても変ることなく、正義のみわざをなしておられます。それは、私たちが主を忘れ、主を捨てたなら、さまざまなかたちで、それに気づかせようとし、気がついた私たちが悔い改めの声を主にあげれば、主は私たちをあわれんで赦してくださいます。

さらに12節ではその流れの中で、イスラエルに王が立てられようとしていることが語られています。つまり、主が王であるのに、なお王を求めたのは決して主のみこころにかなわないことであり、それもまた主を捨てることでもあります。まさにイスラエル歴史は、悪を行い、それを主が罰し、悔い改め、主が救うということの繰り返しだったのです。

12月3日(水) サムエル記第一12章13～15節

「もし、あなたがたが主を恐れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、主の命令に逆らわず、また、あなたがたも、あなたがたを治める王も、自分たちの神、主の後に従うなら、それでよい。」
(14節)

昨日も記しましたように、主がイスラエルの王として治めていたわけですから、王を立てる要求は主のみどころにかなわず、主に背くことでもありました。しかしそれでもなお主は民の要求を聞いてくださり、主は人々の上に王を置かれました。(13節) それに対して主が求めておられることは、王も民も両方が、「主を恐れ」「主に仕え」「主の御声に聞き従い」「主の命令に逆らわず」「主の後に従う」ということでした。(14節) 確かに王を立てることは主のみどころにかないませんでしたが、主はその後王と民がどうするかをあわれみをもって見守ろうとしていてくださったのです。私たちも主のみどころを求めず、行動してしまうことがあります。その時に、あえて主は私たちの願いどおりに物事を進めてくださることがあり、みどころにかなわない歩みをあえて許されることがあります。そして、主はその後私たちがどのような歩みをするかを見ておられます。罪に罪を重ねたり、主のみどころに従わない歩みをするのではなく、主の御前に真実に悔い改めたなら、私たちは、そこから主を恐れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、主の命令に逆らわず、主の後に従う歩みをさせていたいただきたいと思わされます。

15節に「しかし、もし、あなたがたが主の御声に聞き従わず、主の命令に逆らうなら、主の手が、あなたがたとあなたがたの先祖の上に下る」とありますが、9、10節で、イスラエルが悪に悪を重ねるところに主のさばきが下ったことは私たちが見たとおりです。主はご自分の正義をもってイスラエルの罪や悪を正されるお方です。それは私たちに対しても同じです。私たちは、旧約におけるイスラエルの歴史を通して主の正義を知っているのですから、主の御声に聞き従わず、主の命令に逆らうような歩みを避けるようにすべきです。

12月4日(木) サムエル記第一12章16～19節

「あなたがたは王を求めることで、主の目の前に犯した悪が大きかったことを認めて、心に留めなさい。」(17節)

16節で言われている「大きなみわざ」ですが、これは17節の小麦の刈り入れ時に、主が雷と雨を下されるみわざを指しています。小麦の刈り入れ時は、イスラエルでは5～6月の初夏の時期で、ちょうど乾期となります。一方で、11～12月と3～4月が雨期の時期で、聖書では始めの雨、後の雨との表現で出てまいります。つまり、乾期の時期に雷が鳴り、雨が降るといのは、まさに異常気象であり、それは神の大きなみわざにほかならないということです。そのことが起るなら、王を求めたことは、主のみどころにかなわず、主の目の前に犯した罪が大きかったことを認めて、心に留めるようにサムエルは言います。そして、18節でサムエルが語ったとおりになったので、民はみな「主とサムエルを非常に恐れ」ました。そこにいた民は、自分たちが犯した罪のために、主に打たれて死んでしまうと思ったのでしょうか。「私たちが死なないように、しもべどものために、あなたの神、主に祈ってください。」と言います。ここで興味深いのは「あなたの神、主」と言っていることです。サムエルの信じる神は民の神でもあるの

で、この言い方は変です。しかし民は恐れあまり、そのように言ってしまったのかもしれませんが、実際に神から心が離れて、王を求めるような大きな悪を行った民からすれば、「あなたの神」ということなのかもしれません。いずれにしても、この出来事を通して民は、自分たちが主の前に悪を行ったことを素直に認めました。

私たちに対しても主は、周りの兄弟姉妹たちとの交わりやみことばを通して私たちの罪を明らかにされることがあります。その目的は、私たちが罪を悔い改めて主に立ち返ることであり、主を恐れて謙遜に主に従って歩ませるためです。主によって罪が示されたなら、謙遜に罪を悔い改める信仰を持たせていただきます。

12月5日（金）サムエル記第一12章20,21節

「恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行った。しかし主に従う道から外れず、心を尽くして主に仕えなさい。」（20節）

19節で「私たちが死なないように、しもべどものために、あなたの神、主に祈ってください。」と、主へのとりなしを願う民に対してサムエルは、まず「恐れてはならない。」と言います。次に、それでは王政をすぐにやめなさいとはサムエルは言いませんでした。むしろ、王政を主が認められたことをみこころとして歩む中であって、サムエルは「しかし主に従う道から外れず、心を尽くして主に仕えなさい。」と勧めます。さらに21節では、主に従う道から外れる例として偶像礼拝をあげています。「役にも立たず、救い出すこともできない、空しいもの」とは、まさに偶像の神々を指しています。主ご自身はイスラエルの民がすぐに他の神々に心を奪われ、偶像の神々を追うような道へ外れてしまう弱さや罪深さがあることをよくご存じだったのです。それと同様に、主は私たちが罪に傾く性質や弱さもすべてご存じです。その上で常にみことばや兄弟姉妹の交わり、牧師や年配の兄弟姉妹の助言などを通して私たちに罪から守ってくださいたり、道から外れないように導いてくださいます。これが主の恵みであり、あわれみです。私たちは、主の恵みがなければ救いにあずかっていることもありませんでした。また日々信仰が保たれていること自体が主の恵みであることを深くおぼえて、主に心からの感謝をささげましょう。それとともに、主に従う道から外れた時に、主の恵みによって私たちはそこから軌道修正をさせられ、再び主に従う道を歩み出します。しかし、同じ罪を犯し続けることはまことの悔い改めではありません。むしろ罪を悔い改めたなら、私たちは主の助けをいただきながら、主に従う道から外れず、心を尽くして主に仕え続けたいと思わされます。

12月6日（土）サムエル記第一12章22節

「主は、ご自分の大いなる御名のために、ご自分の民を捨て去りはしない。主は、あなたがたをご自分の民とすることを良しとされたからだ。」

「ご自分の大いなる御名のために」とは、救いの神の恵みを表す慣用表現です。つまり、主はどんな中にあっても常に救いを通して恵みを与え、ご自分の民を捨て去りはしないというのです。ここに主はご自分の真実と正義を明らかにしてください。8～12節で見ましたように、イスラエルの歴史は、出エジプトの救いのみわぎの後、主を忘れ、主を捨て、主がイスラエ

ルの民を他国人の手に渡し、その中で救いを求めて叫び声をあげ、それを聞いて、主が敵の手から救い出し、また主が王であるのに他国のような王を求めるといのように、罪を犯して、敵の手に渡され、そこから救いを叫ぶなら、主が救い出し、また罪を犯すということのある意味繰り返しのようになります。しかし、私たちもこれでいいと思っはなりません。それは真実の悔い改めとは言えないからです。少なくとも私たちは意図的になされる罪や習慣的になされる罪から解放されて、良心のくもりなく、主に従い、心を尽くして主に仕える道を選び取らなければなりません。そのような歩みが主の助けと恵みによってなされるように祈りましょう。そして、なぜ「主は、ご自分の大いなる御名のために、ご自分の民を捨て去りはしない」と言えるのかと申しますと、「主は、あなたがたをご自分の民とすることを良しとされたからだ」と、その理由を述べています。つまり、イスラエルを選んでご自分の民とされたことが主のみこころだということです。イスラエルは、周りの国々から比べれば、弱く小さな存在であり、すぐに主を忘れ、主を捨て、偶像礼拝の罪を犯すような者たちです。ですから、イスラエルが選ばれた理由を探そうとしても何も見当たりません。ですからイスラエルの選びは、ただ主のみこころによる恵み以外にはないのです。それと同じように、私たちが主にあつて救いに選ばれたのは、ただ主の恵みによるのであり、そこに主のみこころがあつたということです。ですから、私たちには何も誇るころはなく、ただ主を誇り、主に感謝をして、主の御名をたたえるだけです。それとともに「わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」（へブル人への手紙 13章5節）のみことばをおぼえて、主の変わらない真実に心から感謝をささげましょう。